書評・J・B・オーア著『白人のディレンマ・食糧と將来』

Orr J. B. with the co-operation of Lubbock, D., *The White Man's Dilemma, Food and the Future*, 1953, p. 124, London.

逸見謙三

戦争を経過する度に経済は激変する。第二次大戦を経過して、西欧とくにイギリスは戦前と全く異つたその世界経済における地位を占めるようになつた。それは食糧に関して「買手市場における富裕国から、売手市場における貧乏国となつた」（本書一〇五頁）のである。この事態を二つの世界に分れているという、また主要工業国が軍備によらざれば不況に見舞われるという、更に後進諸国は人口増加と食糧不足になやまされ続けているという等々の現実の世界の中で理解すると、西欧即ち白色人種は極めて困難な立場にあることがわかる。著者はこの困難を題して白人のディレンマという。決して分析的ではなく、単なる啓蒙書に過ぎない本書が興味に富むのは、食糧問題を広い視野から取扱い、従つて世界のこの現実を卒直に認めた点にある。衆知の様に著者オーア卿は国連食糧農業機構にあつてこの問題に取り組んで来た。その際の、又その際に得た信念によつて本書が書かれたに相異ない。本書は国際食糧問題への格好の入門書として広く読まれるに値する。更に読者は本書によつて白人のディレンマは等しく日本人のディレンマなる事も知るであろう。

簡単に内容を紹介しよう。

先ず白人のディレンマであるが、これは次の如くである。現実の世界で最も注目すべき事態としてアジアの勃興がある。封建諸制度の破壊、白人の支配からの解放、工業化等々。これは中東からアフリカに波及していく。これ等の地域の人口はイデオロギーよりも何よりも貧乏と食糧不足とに反撥する。しかも人口は絶えず増大している。他方に、世界の基本的問題として無限に増大し続ける工業機械をもつて何をなすべきかの問題がある。軍備によらざれば不況、そして広範囲の失業に導く。最后に食糧供給の問題がある。著者によれば食糧の安定は人類文明の基礎をなすが、それは西欧の過去の発展の際は低い生活程度の農業労働と処女地の肥沃に依存していた。現在世界は北米、オーストラリヤ等の処女地を食いつぶして頼るべき処女地をもたない。この様な事態において西欧側のとるべき態度は明らかである。工業力による力の政治、軍備拡張（これは第三次世界大戦、即ち人類文明の破壊を意味する）の方向に進まないで、工業力、科学技術を食糧の増産と食糧資源の確保に使用して人類の食糧を保証し、後進国を貧乏から救う方向に進むべきである。力の政治に終止符をうつて、世界協力して後進国の開発に向うべきである。この方向に多くの努力がなされた The International Institute of Agriculture, League of Nations, The Hot Springs Conference, F.A.O.,

The International Emergency Food Council その他 United Nations 等々の活躍は全てこの線に沿うものである。しかし乍らこれは現在アジア、アフリカ、中東の諸国民の地位を向上せしめるものである。著者によれば有色人種は決して白人に劣るものではない。教育を施され、科学技術を身につければ白人と対抗しうるものである。從つて上述の線に沿つた西欧側の態度、行動によつて「アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの土人が白人に匹敵する様になり、これ等の大陸が工業化すると共にヨーロッパ人とその後裔たるアメリカは、十七世紀から十九世紀に到る三〇〇年間の征服によつて得た世界支配を失うでもろう」（本書九九頁）。この事実、即ち工業力による武力、第三次戦争を惹起して人類文明を一挙に破壊するか、工業力を平和に使用して人類の食糧を保証し、後進国を開発して白人の有色人に対する優位性を失うかの何れかを採らざれば工業はスランプに陥いるという事実、これが白人のディレンマである。

本書は一二〇頁の小冊子で、序章・第二章一時代の終篇、第三章新しい時代・我々の巨大な機械をもつて何をなすべきか、第四章食糧・社会の安定と経済繁栄の基礎、第五章食糧必要量と摂取量、第六章世界の食糧供給量と必要量、第七章人口の増大、第八章食糧資源の消燼、第九章マルサスの幽霊と近代科学の力、第十章世界食糧問題解決のための国際的試み、第十一章白人のディレンマの全十一章と、附録、英国の食糧事情、統計からなる。

特に秀逸なのは第八章食糧資源の消燼一〇頁で、紀元前の昔から現在に到るまで都市文明の勃興が処女地の存在を必要とし、いかにそれを消燼してきたかを説いている。我々が軽い意味で口にする土壌侵蝕の重要性を感ぜしめている。その他の各章も或いはイデオロギーを論じ、科学技術の現状を説明し、更に人口論、栄養問題、ドル不足問題に及ぶといつた風に考慮する範囲は広く、その各々が豊富なる事実に満されている。

欠点についていえば本書が頁数に比して余りにも多くの事実を盛りすぎたということであろう。全くの啓蒙書でありながら説明が不足で、予備知識がなければ理解しにくい点が若干ある。

最后に、著者は本書で、其処に盛られた若干の重要でない見解を除外すれば、現実の説明に終止した。私は更に著者が、現実問題への具体的解答の書を書かれる事を希望したい。